慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	詞品論攷 : Three Ranks 采用の可否について
Sub Title	A study of Ts 'u-p' in. : the advisality of adapting "Three Ranks" for the study of Chinese.
Author	川本, 邦衛(Kawamoto, Kunie)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.11, (1961. 1) ,p.67- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00110001-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

詞品論攷

――Three Ranks 采用の可否について――

川本邦衛

(一)

本稿にいう〝詞品〟は、王力 Wang Li の術語である。それは王力によって所謂〝詞類〟と明瞭に区別されている。〝詞品〟論は〝三品〟説の理論的展開をその内容とするが、王力によって〝三品〟説がいわれる時、それはオットー・イエスペルセン Otto Jespersen の Three ranks を、その方法論的立場として中国語研究を行うことを意味している。

思うに王力は、現存の中国の言語学者ではその業績最も顕かな一人である。近代的な中国語法の研究は、清末の馬建忠をもって嚆矢とするのが今日一般の論であるが、彼が兄馬良の援助のもとにものした〈文通〉十巻が公にされたのは、一八九八年である。王力は、それより三年おくれて誕生しているが、彼が中国語法に関する研究論文を発表して学界の注目をあびはじめたのは、二十世紀前半の半ばをすぎてからである。ところで、馬氏以後の中国における語法研究は、西欧の文法学乃至言語学の業績または理論への依存によって特徴づけられるが、それらを摂取する学者の態度によって、我々は二十世紀前半を、一九三六年を境として前後の二期にわけるのを常識としている。前期の単なる模倣の姿勢に対して、後期は理論を藉りると同時に、中国語の特性を重く視ることにより、さらに新しい体系の創造に力が注がれた時期であるが、三六年がこの両期の分水嶺となっているのは、実は王力の劃期的な論文〈中国文法学初探〉[註1]が

この年に出たことを意味する。王力は続いて〈中国文法中的繫詞〉[註2]を発表して新気運の開始に与ったが、四三年に到るや〈中国現代語法〉2冊、四四年にはその詳注である〈中国語法理論〉2冊を世に問うて話題をまき、爾後の研究に少からぬ影響を与えた。王力はこれら二個の作業において、殊に前者においては〈紅楼夢〉より例文を採りつつイエスペルセンの Three ranks の方法を中国語法研究に適用して、冒頭に述べたように〝詞品〟論と称せられる語法体系を展開している。その成果はかなり高く評価されるべきもののように印象するが、その後ムドロフ Б. Г. Мудров などの批判を受けて、[註3]彼が〝三品〟説を取り消し、商務印書館にはかって前述の二書の出版を停止したことはこの道を進むものに周知の事実である。さらに、五四年の新版自序において、王力は〝三品〟説―〝詞品〟論を、それが反マルクス・レーニン主義的、反スターリン的な誤りを犯している故をもって完全に抹殺することを宣言し、かつこの体系が〝三品〟説を屠った後において大部分にわたる改訂を施されるであろうことを予告している。

しかし、そこに述べられた自己批判ともいうべき〝三品〟説取り消しの経緯は、我々が充分納得できないものを含んでいるように思われる。その一部には確かに正確な反省もあり、またイエスペルセンの理論の応用についても、本来若干の異論があることを否定しないが、なおかつ、王力の自序には、かなりのポーズのあることを指適したい。そこには実際に王力が〝三品〟説を、自ら述べているような考え方で取り消す意志があるのか否かを疑わせるに充分な根拠があると思う。そうしたいいかたを許されるならば彼の予告は裏切られる恐れなしとしないのである。本稿においてはこれらのことについて考えると同時に、できれば中国語の分析に際してイエスペルセンに拠ったことの当否をも勘考したい。

註1　清華学報第十一巻一期

註2　同右　第十二巻一期

註3　Б. Г. Мудров; Китайское языкознание после выхода в свет трудов И. В. Сталина по языкознанию., Известия Академии наук СССР: Отделение литературы и языка, 1952, Ⅲ. стр. 228～237.

(二)

最初に前述の二著作に示された王力の語法体系における特質を纒述し、その考え方と、それのもつ学史上の地位を知る必要がある。王力は前章に書きとめた第一、第二の論文を発表して学界に一石を投じた時、清華大学において音韻論を講じていたが、一九三七年の戦争勃発に際して、清華大学を去り、南下して国立西南連合大学で中国語法の講座を担当することになる。〈中国現代語法〉は少くとも当時の彼の思索の結実したものである。彼の言によれば、それは一九四〇年度の同大学における講義を、その後四年間の改稿と補充を加えて発表したものであるが、それは〈紅楼夢〉を対象として新しい文法体系を作り上げるのに一応の成果を示しているといえるであろう。これに対して〈中国語法理論〉はその詳注であり、前者が具体的事項によって体系づけられているのに対して、これはそれに理論的裏づけを与えたものに他ならない。ただし、この体系の創造は、朱自清 Chu Tsü-ch'ing の指適するように、[註1] 初期の二篇の論文を基礎としてその上にたてられたものであり、三〇年代に確立された彼の思考の発展であると考えなければならない。

材料の標準を専ら〈紅楼夢〉に限ったのも、また王力のこの研究の稀有の成果を支える大きな特徴であり、劃期的な試みであるが、この点についての王力の意見はおよそつぎの如くである。[註2] すなわち文法事項を説くにあたって特に例文を案出することは、往々にして、不自然であるのみならず、屢々事実を歪曲する。もし一書を選んで例文を探すという原則に徹するならば、語法分析の正確は誤りなく期すことができる。とくに〈紅楼夢〉を選定したのは、それが著名な文学作品であり、北京語で書かれているという理由で国語の条件に合致すると考えられたからである。朱自清はこのことに関連してつぎのような批評を与えた。この方法はまず時代を確定していて、史的な論議の葛藤を省き、〈馬氏文通〉も免れえなかった欠点を避けうる。同時にこのことはその言語の用いうる地域の確定を意味する。方言差が想像を絶する中国語の分析にはこれは極めて有意義である。北平官話の主流であるいわゆる北京語が、概ね標準語とされる現在において、北平官話の古典的文献である〈紅楼夢〉に着眼したことは妥当である。第三には材料の確定をあげなければならない。話し言葉を調査し、記録してこれを材料とする時、口頭の変化を無視できないが、書かれた話し言葉は、話されている話し言葉と比較して、通則を得る便宜があるのは勿論である。中国語の文言と白話、そしていわゆる話し言葉相互間の差異についての事情を知るものは、朱氏のこの批評を肯定せざるをえない。

しかし、この著作の特色は、その材料の特殊性よりむしろイエスペルセンのいわゆる〝三品〟説を基本的な考え方とした〝造句法〟

にある。そこに示された中国語の統辞法の分析では、〃詞〃は結合の機能により、〃首品〃、〃次品〃、〃末品〃に分類され、これを利用して、〃詞〃、〃仂語〃、〃謂語形式〃、〃句子形式〃そして〃句子〃が究明される。しかし、王力が完全にイエスペルセンの模倣に走って、嘗てスィート Henry Sweet の体系の移植に汲々とし、中国語の特性を無視した前人[註3]の轍を踏んでいるという批評は、王力の創見を最も窺うことのできる〃単句〃の分析を知る時に、全く提出される意味を失うであろう。王力は〃語法成分〃の一章において〃繫詞〃の問題を論じているが、中国語の基本的構造の研究に関してこれは重大な意味を孕んでいると思われる。すなわち、王力は詳細な研究の結果〃繫詞〃は中国語には不必要であるという結論を報告する。それによれば中国語においては〃句子〃に動詞という要素が必らずしも要求されない。従って、これまでの多くの研究が、〃句子〃の分類に際して叙述、疑問、命令、感嘆の四つの領域を認定していたのに対して、印欧諸語のようにこの四分類では形態の上からも、統辞法の上からも何等差異の認められない中国語においては、それが単に意義及び論理の問題に移項されてしまう誤りを訂正し、〃判断〃、〃描写〃、〃叙述〃の三種の分類を提出するのである。これらは勿論〃謂語〃の分析にその根拠を置く――〃謂語〃が〃動詞〃であるか、〃静詞〃乃至〃繫詞〃であるかに従って進められた考察の結果である。蓋し〃描写句〃は中国語の、そして〃判断句〃は特に現代中国語の特徴と見るのは正論であろう。これら〃簡単句〃の分類のほか、〃複合句〃を〃等立〃、〃主従〃に分けているが、王力は複合句の領域を厳密に規定して、一般に複合句とされてきた、例えばいわゆる〃包孕句〃「衆人知賈政不知理家」などは簡単句であると断定する。これもまた〃句子形式〃を〃詞品〃論によって分析した思索の結果である。〃簡単句〃にはその創見が最も多く見られるが、中国語の特性として〃簡単句〃は一個の動詞をも必要としない場合があり、逆に二個以上の動詞が容れられる可能性をもっていることを示し、これは印欧語とは全く隔離された世界であり、〃謂語形式〃の研究はこの事実を指適するのに成功している。朱自清によれば[註4]、「紫鵑……便出去開門」は、在来の語法学者は、一種の平行的乃至等立的な〃複合句〃であると判断して来たが、王力はこれを〃簡単句〃と考える。何となれば〃出去〃〃開門〃は連続行為であり、二個の〃謂語形式〃は独立した一個の言語単位と認められるからである。さらに「東府裏珍大爺来請過去看戲放花燈」は意義上明らかに〃簡単句〃であるが、王力は五個の〃謂語形式〃が一個の〃簡単句〃の〃謂語〃を形成していることを看破し、これを〃遞繫式〃と命名している。これを基本的構造であるとする王力の理論は、さらに中国語特有の文構造をすべてこれが変化した構造であると考え、現代中国語には〃能願式〃、〃使成式〃、〃処置式〃、

〝波動式〟、〝緊縮式〟の五種の形式が確認されるとするのである。

その他ブルーム・フィールド L. Bloomfield の学説を念頭に置いて考究された〝替代法〟、〝称数法〟は秀れた研究であり、従来、〝量詞〟乃至は助数詞という概念の下に考えられて来た中国語の一特質を解明する、〝称数法〟は、王力の独創になる〝欧化語法〟の理論と共に、語法学史上記憶されるべきものであると考えるが、ここでは王力の〝造句法〟の理論、殊に特殊な構文に関する理論が、その後の中国語研究に少からぬ影響を与えていること、そしてそれが〝三品〟説の導入によって奏功したものであることを敢えて指摘しておくに止めたい。

註1　王力；〈中国現代語法〉（一九五四）朱序　p 4。

註2　同右　例言　p 1。

註3　川本「中国語に於ける品詞分類の標記について」（芸文研究第六号・一九五六年）参看。

（三）

すでに繰り返して述べてきたように、王力の〝三品〟説の骨子はイエスペルセンの Three ranks である。結合の機能に基いて、中国語の詞を三品に分類し、これによって文構造を分析しようという思想は、前述の通り大いに傾聴すべきであると考えてよい。しかし王力はイエスペルセンの理論をどのように適用したのであろうか。本章及び次章においては専らイエスペルセンによって示された方法と、王力の〝詞品〟論の事項とを若干比較し、王力がイエスペルセンの学説を踏襲する時、それが単なる模倣であるか否か、またそのいずれにせよ、はたしてそれが妥当であるか否かを問う助に供したい。

一応順序として書き止めるならば、イエスペルセンは Three ranks の説を彼の Modern English Grammar (1914) (MEG) においてはじめて開陳し、さらにその後の労作である The Philosophy of Grammar (1924) (PG) において、多少術語を変更しつつ再びこの説をもって、そこに展開された文法原理を貫き、後に述べるようにそれが公にされた翌一九二五年にはオット・フンケ Otto Funke の徹底的な批判[註1]があったにも拘らず、これを反駁して[註2]、さらに Essentials of English Grammar (1933) では同じくこの

説を固執している。

前述の反駁の論文においては、この説を批判するに、第一の書を問題にしたことについてフンケは激しい非難を蒙っている。そしてまた、王力はその説を立てるにイエスペルセンの前述の第二及び第三の書のみを参看したことを自ら明らかにしているが、[註3] ここに Three ranks を鳥瞰するにあたっては、これらのことに対する考慮は必要がないように思われる。というのも、王力は特定の書物の一部を剽窃したのではなく Three ranks と称せられる学説を適応したのであって、MEG に述べられたところは、この説の重要点を含んでいる点では、啓蒙的な第三の書よりむしろ重きをなすと考えられるからである。すなわち我々がフンケの指適する通り、[註4] またフンケがそこに引用しているホープス Johannes Hoops の言葉通りに、[註5] Three ranks の根柢的な理解のためには、MEG 及び PG を等分に見ることは、何等妨げがないのみならず、事実当然でさえあるという立場に立つべきであると考えられる。

イエスペルセンによれば、いわゆる、品詞は、形式上の標準によって規定されるべきものであり、いうなれば純粋に文法的 (purely grammatical) なものである。しかるに文法的機能より見た時、これらの形態範疇とは別の系列の論理的範疇が考えられる。すなわち Ranks (「階」[註6] または「三つの順位」[註7] 王力によれば〃詞品〃) である。これら二個の範疇または系列は「同一の語または形式を、まず個別のものとして、つぎに他の語との結合におけるものとして眺める場合の異った角度を表わすものである。[註8]」いい変えれば両系列間の重要な差異は、形態範疇は孤立した語をその語形論 (lexicology) において、すなわち辞書的価値において取り扱うが、一方これに反して〃詞品〃は、二個以上の語が連続して発話に該当する場合、または単に語のみならず語の結合によって構成されるある統語群が、聴き手の精神内に一つの表象を喚起する時のそれらの意味論的順位、換言すれば論理的関係を問題とするにある。かくて、我々は品詞という形態範疇のほかに、一次語 (primary word) 二次語 (secondary word) 三次語 (tertiary word) という順位を得る。たとえば、extremely hot weather のような語群においては、最高の重要性をもつと判断される一語 (one word of supreme importance) があり、それは第二の語によって限定される。このように限定されるか、または限定するか (defined or defining) の意味論的な語の相互の関係に基いて、それらを三つの階級 (MEG では、前述の述語のほかに principal, adjunct, subjunct という述語も与えられた) に劃分するというのが、この説の基本的な考え方である。

王力は理論的にはこの基本的な思想を、そのままその出発点としているように見受けられる。すなわち彼の定義するところに従うならば、「凡そ〝詞〟の句中にあってその主要の地位にあるを〝首品〟」「地位の〝首品詞〟につぐを〝次品〟」「地位の〝次品〟に及ばざるものを〝末品〟と称する」[註10]ことになる。具体的には〝純白之馬和高飛之鳥〟においては「純（Ⅲ・末）白（Ⅱ・次）〈之〉馬（Ⅰ・首）〈和〉高（Ⅲ・末）飛（Ⅱ・次）〈之〉鳥（Ⅰ・首）」と分析される。[註11] 一見してわかる通り、〝之〟については王力は〝詞品〟を論じていない。この点について、そして同時に根本的な問題として我々は、〝三品〟説の前提となっている王力の〝詞類〟に関する議論を考えておかなければならない。あとで判明するように、それはこの説の展開について決定的な条件を孕んでいるからである。

すでに見たようにイエスペルセンによれば、英語においては、happiness, happy, happily がそれぞれ名詞、形容詞、副詞であるとするのは辞書の決定するところであるが、それらが一次語（首品詞）二次語（次品詞）または三次語（末品詞）の何れであるかは辞書は全く関係がなかった。

我々は、英語においては明らかに基本的なケース――すなわち原理上は一致する必要をもたないが、〝詞品〟は形態上の語類と互にある程度までは一致乃至平行すると考えられるのであるから――において、〝詞品〟と平行または一致する系統の諸類に、すでに形態論的見地より分類されているような〝詞類〟が、王力においてもまた、確立されていると思ってはならない。その点については王力はイエスペルセンと異なる立場に立つ。まずこのことを考えてみよう。

周知のように馬氏以前においては、伝統的な中国語の文法は、詞を二個よりさらに多数のデイマーケイションに分類しなかった。〝詞〟は二類すなわち、〝実詞〟及び〝虚詞〟があるのみであった。それは印欧語と異なり、一語よく多類に通じうる中国語の特殊な性格に由来している。中国語無定類論の提起される可能性の所以もまたここにあった。いわゆるアリストテレス的体系に依存する品詞の世界を中国語にもちこもうと試みる時、形態標記がないと信ぜられる〝詞〟を劃分することはすでに極端な困難を感ぜしめるものであるのに、意味論的にも一語の機能が多類にわたる現象は、人に絶望をすら与えるものであろう。その間の理論的状況は、先年中国語文界に喧すしく行われた漢語品詞論争の内容がよく教えるところである。（ただしこの論争は、王力のこの研究が公刊された後ほぼ十年たってみられたものであることに注意せよ）しかし王力は、形態論、その他の伝統的な言語学の理論によらない語類区分をここに示す。すなわ

ち、王力は〝詞類〟は概念の範疇(notional category)より分類されるべきであるという理論に基いて、〝詞〟を〝理解成分〟と〝語法成分〟にわけ、前者を〝実詞〟五類(名詞、数詞、形容詞、動詞)に、後者を〝虚詞〟三類(聯結詞、語気詞、記号)と〝半虚詞〟二類(代詞、繋詞)及び〝半実詞〟(副詞)に劃分する。[註13] 斯様な分類の後、王力は〝詞品〟は〝虚詞〟以外のものについて論ぜられるべきだと考えている。この結果我々の得るものは確かにかなりあいまいな体系であることは容易に想像がつく。この点について我々は王力に同意するわけにはいかないのである。しかも王力はイエスペルセンにならって、〝詞〟は〝字典〟にある時〝分品〟されず、〝句〟にある時は〝分類〟されないことを強調する。[註14] 無論、イエスペルセンもまた、〝分類〟にあたっては最も厳密な意味での形式を、唯一の標準として取り上げることを遵守してはいない。彼は、もしもそれを実行するならば、「must は屈折がないから the, then, for, as, enough などと同じ類に属す」という馬鹿げた結果に到達することを警告している。そして言語構造の両極をなす二つの類型を整理し、その一端に中国語を考え、英語の a *round* of a ladder / He took his daily *round*. / a *round* table / He failed to *round* the lamp-post. / Come *round* tomorrow. / He walked *round* the house. など一詞無定類の例を描げて、英語は両極の二つの類型の中道を歩んでいるが、漸次中国語のもつ性格に傾いてきていることを指示する。しかし彼は決して王力のような勇気を我々に示してくれてはいないのである。そこで、理論的展開においては、まったくイエスペルセンに追従しながら、前提となる領域においてはそれと異なり、しかも不明確な体系を把握しているに過ぎない王力にあっては〝詞品〟論は必然的に Three ranks とは若干異なる姿勢を示してくるのは、蓋し〝我賛成他的主張〟の〝主張〟を、または〝他的思想很好〟の〝思想〟を、概念の範疇に照合して〝動詞〟と規定する時また止むをえないのである。

註1 Otto Funke; Jespersens Lehre von den 'Three Ranks.' Englische Studien, 60. Bd. (1925) pp. 140〜157.

註2 Otto Jespersen; Die grammatischen Rangstufen. ibid. (1926) pp. 300〜309.

註3 王力;中国語法理論 上冊 (一九五四) pp一三〇〜一三一 n 32、「葉氏在 Syntax 一書裏又有所謂四品, 今不採」と附記す。

註4 Otto Funke; Ein letztes Wort zur Rangstufenlehre Jespersens. Englische Studien, 61, Bd. (1927) pp. 309〜310.

註5 Johannes Hoops; Englische Sprachkunde. p. 170.

註6 Dictionary of English Philology, Kenkyusha. p. 852.

註7 半田一郎訳；文法の原理 p一二〇ff。

註8 Otto Jespersen; The Philosophy of Grammar. p. 122。

註9 ibid. § 7. p. 102.

Otto Jespersen; Modern English Grammar on Historical Principles. Part II, p. 2 ff. 1. 21.

註10 王力；中国現代語法 上冊 pp 42～43。

註11 同右

註12 王力；中国語法理論 上冊 p 33。

註13 同右；中国現代語法 上冊 p 24。

註14 同右 p 33。

註15 PG. p 55.

(四)

イエスペルセンはこの学説の論理的基盤を語の概念の、より大なるか、或いはより小なる「次」への特殊化の原理に置いている。[註1] 彼の措辞によれば「他の語によって限定される語はそれ自身常にそれを限定する語よりも特殊である。無論、後者は前者をそれ自身においてあるより、特殊にするために働くのである。」[註2] すなわち語の表象する概念の外延より見た時、ある発話において一次語は二次語よりも特殊であり、それは三次語より、より一般的(more general)ではないという主張がここにある。これはこの学説に附髄する最も重要な条件である。しかしながら、王力はこれにとくに考慮を払っていない。ということは、最初の王力の叙述[註3]からいって、また後述するところからしてもこの点は王力によって素直に受け入れられているということに考えてよい。ところが我々はフンケがなした批評のうち、このことに関する概念の特殊化と実体概念についての部分に最も興味をもつ。フンケによれば、かかる比較が試みられるわけは、

たとえば a furiously barking dog において、dog や barking などの各語にそれぞれ意味論上、概念といったようなものが対応しているかのように考えるからであるという。たしかにその通りであって、蓋しこの解釈は全く肯定されるべきである。そしてフンケは、ところが「実際はかかる例において概念が対応するといえるのは dog だけであり、それは『犬』という動物の種類の概念的表象を意味するからである」という。つまりマルテイ Anton Marty のように考えるならば、この語のみが、自義的（selbstbedeutend）であってそれ自身で独立に表象を喚起しうる言語表現であるに対して「barking や furiously は単に共義的（mitbedeutend）である。これらはそれだけ独立に離しては何らの概念的表象も喚起しないで、ただ a furiously barking dog というような連関の中においてはじめて一定の機能を果す」だけだが、この観点からは概念特殊化の原理は容易に是認されないのである。[註4] 我々は一応この立場を理解するが、まったくそれに与するわけにはいかない。何となれば、思うにそれは機能という術語そのものの解釈によって考えがわかれてくるものだからである。従って、フンケのこの批評に対して書かれたイエスペルセンの反駁もまた我々にはある意味を訴える。それを否定することはできないような気がする。イエスペルセンはそこでは purely logical という言葉は、PG において捨てられたことを指示し、かつ問題は意味の領域にではなく、機能の領域にあるとして、機能とは、文法的、形式的機能のみを指すのであり、フンケのいう論理的（logish）あるいは意味論的（semasiologish）とよんでいるところのものは入らないと答えている。[註5]

ところが、前章で明らかにしたように、王力は〝実詞〟については少くとも、それに対応する概念の範疇をすでに〝詞類〟の区別に際して認めるのであれば、〝他的思想很好〟において、〝的〟を除外するすべての語については、これに対応する概念の存在を容認する立場で各概念の外延を比較する原理に立って、各語の相互の従属乃至限定関係を考察する筈である。しかし、概念の領域は、言語表現からは独立の範疇によって成立している。次章でいうようにこれは確かに言語の性格如何によらない共通性をもつ。その時我々は王力が、〝三品〟説をある言語においては不必要とし、とくに中国語に対して必須のものとした考え方[註6]に疑義をもたざるをえない。少くとも王力は〝三品〟説を採用するに際して、イエスペルセンの線より脱出すべきではなかったのではなかろうか。仮にそれが是とされるにしても、そこに我々が納得するような理論的省察こそあるべきである。この点で、王力の応用はやや安易に過ぎたきらいがなきにしもあらずである。従って〝詞品〟論において王力の行っている作業も、総体としては単に〝詞類〟の機能上の領域を〝三品〟説に従っ

て確認することをその主たる目的とするに流れたところが少くないように思われる。再び敢えてそれを是とするならば、少くとも王力は〝句子〟における機能上の〝詞〟の分類の焦点を奈辺に定めるかについて理論的展開を示す責任があろう。

つぎに王力が Three ranks を採用するにあたって故意にイエスペルセンと軌を異にした点のうち、非難に当らない点を挙げよう。そして我々はそれが中国語の特質を考慮に入れた結果であることを記憶しておかねばならない。

それは〝仂語〟に関する事項である。王力の定義では、〝次品〟と〝首品〟の結合、或いは〝末品〟と〝次品〟の結合、または〝同品〟の結合による語群が、一個の〝詞〟の果す機能をもって発話に該当する場合、換言するなら、二個以上の〝実詞〟が一種の複合の意義単位をなすとき、これを〝仂語〟と称する。[註7] この〝仂語〟が王力によって〝主従〟〝等立〟の二類に分類されることはすでに述べたが、問題は〝仂語〟の領域にある。中国語でいう〝仂語〟とは、英語で一般にいう phrase に近い観念であるが、若干それとは趣きを異にするようである。ソネンシャイン Edward Adolf Sonnenschein によれば phrase とは「一個の品詞に相当して (equivalent to a single part of speech) それ自身の主部と述部をもたない語群 (a group of words) をいう」。[註8] (スイートはそれを連語 word group と呼び、その他カーム Curme、ポウツマ Poutsma、クルイジンガ Kruisinga など phrase を採らぬ英語学者は多く、イエスペルセンもその一人であるが、この定義は大体英語研究に普遍的な考え方であろう)。しかしながら王力はこの定義を「中国語には finite verb の形式が存在しないし、一個の語群に〝謂語〟が含まれているか否かを確認する手だてがないから (無法弁認一個詞羣裏是否包含着謂語) 中国語に対しては不適当なものである」[註9] という。これに対して、イエスペルセンは、スイートと同じ術語を使用するが、それは「二語またはそれ以上からなる」が、「時には一語なのか二語なのかきめるのが困難なことがある。to-day は、本来二語であったが、今ではハイフンなしに today と綴る傾向が強くなり、事実、from today といいうることから to が本来の意味をもっているとはもはや感じられなくっていることがわかる」といい、〝三品〟説的には「一次、二次、三次のいずれであるかを問わず、すべて連語は相互に、Three ranks の示す従属の関係に立ついくつかの要素を含むことができる。連語の rank と連語内部の rank とは別のものである」[註10] とする。王力はこのイエスペルセンの説を、とくにその最後の部分を完全に黙殺する。彼はそこでは、依然として〝三品〟説の立場を固守しているにも拘らず、〝仂語〟に関してはイエスペルセンよりむしろ、ブルームフィードルに準拠して、その内心構造 (endo-

centric construction）の理論に注目している。ブルームフイールドによれば、いわゆる統語群は、その直接の構成要素の一、或いはそれ以上と機能上同一であるか否かによって内心、外心（endocentric, exocentric）の二つの構造に分けられる。内心構造においては、たとえば結果統語群 resultant phrase "poor John" は主要部（head）John と同一の機能を果し、その中の連体辞（attribute）poor の機能は全体として〝詞品〟の場におかれたとき全く関係がない。[註11] 王力はこれらを〝向心結構〟と呼び、〝仂語〟は〝向心結構〟だと規定する。[註12] 王力が〝仂語〟を〝主従〟、〝等立〟にわけるのも、すべてブルームフィールドによっているので、イエスペルセンは王力のこの卓説にほとんど与っていないということができる。内心構造は、二個或いはそれ以上のより小なる自由形式を含むすべての自由形式を指すから、ソネンシャインの phrase よりその領域は大であり、かつ、王力が〝仂語〟より大なる単位とした〝句子〟もまたそこに含まれる。逆にイエスペルセンの連語はソネンシャインの定義より小なる単位であったことは先刻見た通りである。そこで王力の〝仂語〟はこの両者の間の巾広い観念を意味することが明らかになった。その省察は当然中国語に普遍的に発見される統語群のもつ特異な性格に出るものであり、この一事によっても、王力が Three ranks を、ただ無批判に模倣したという非難を排斥できると思うのである。

なおこの結果、つぎのことに多少の注意をしておく必要もある。王力は〝仂語〟の分析に際して、たとえば〝首品〟と〝次品〟の聯結のケースを二分し、一方を〝首品〟に匹敵するものと考えて〝組合式〟なる名を与え、他は〝次品〟に該当するとして、〝小牛、山頂、車夫〟（〝通組式〟になると〝馬車夫、大紅袍、爛羊頭〟など）と〝説話、撒謊、告状、打仗〟などを区別するが、このやり方は、これらの統語群がそれ以上の単位において、機能上の考察によって〝詞品〟を決定されるというイエスペルセンの考え方に一致しない。[註14] 換言すれば adjunct と primary の結合である Sunday afternoon が Sunday afternoon was fine では primary, A Sunday afternoon concert では adjunct、更に He slept all Sunday afternoon では subjunct であるというようなやり方を王力は拒否しているのである。無論詳細に見ていけば、王力の〝造句法〟とイエスペルセンの Syntax は細かい点においてなお多数の相異を見出すことは可能である。ここでは最も目立つ差異を考えて、Three ranks は、そのままの姿で王力の中国語研究に導入されたのではないことの証左とするに止める。[註18]

註1 Otto Jespersen; The Philosophy of Grammar. p. 75 ff.
Otto Jespersen; Modern Eng. Grammar, Pt. II. p. 24.

註2 ibid; p. 3.

註3 王力;中国語法理論 上冊p 34°

註4 Otto Funke; Jespersens Lehre von den 'Three Ranks', ibid.

註5 O. Jespersen; Die Grammatischen Rangstufen, ibid.

註6 王力;中国語法理論 上冊p 34～47°

註7 同 ;中国現代語法 上冊p 44・p 54°

註8 Edward A Sonnenschein; A New English Grammar, § 44.

註9 王力・中国語法理論 上冊p 48～49°

註10 O. Jespersen; The philosophy of Grammar, p. 113.

註11 L. Bloomfield; Language, pp. 194～195, Syntax 12, 10.

註12 王力;中国語法理論 上冊p 48°

註13 王力;中国現代語法 上冊p 44 ff°

註14 O. Jespersen; ibid, pp. 113～114.

(五)

王力は中国語研究が、本来統辞論の問題だと考えてそこに何か原理的なものを求めた時、〃三品〃説を若干改めながら適用しなければならなかった。この時、彼はこの学説は、一般に印欧系言語の研究に関係のないものと考えている。もし〃詞類〃がそれぞれ一定の形態標記をもち、その標記を示す〃詞〃には必らず一定の機能が対応するとすれば、〃詞品〃論はたちゆかないものである。またそれ

が一定の標記をもたないとしても、一個の〝詞〟に必らず一定の機能があれば、同様の結論を得る。王力が印欧系言語の殆んどにこの学説が関係がないと考える所以である。ところが英語においては些か事情が異なる。そこでは〝詞〟は本来決して一定の機能をもっていない。その〝詞類〟の範囲と〝詞品〟の範囲は平行せず、従って現代英語に関する限り〝詞〟が無定品であるということも強ち否定できない。この意味で〝三品〟説が英語研究に出たことを当然だと王力は考えるが、ひいては、〝無定品〟の点に就いて論ずる時、中国語は英語に著しく近似するのみならず、さらにその程度は一段とはなはだしい故をもって、中国語の側に、より多く〝詞品〟の論ぜられる理由があるとするのである。このように見てくると、この二個の言語の近似性が肯定される限りにおいて、もしイエスペルセンの思想が是とされるならば、王力もまた根本的な非難を受けることはない筈であった。しかるに王力が〝詞品〟論を否定するに至るような批判は、主としてイエスペルセンが蒙ったような批判とはまったく異なる次元からなされている。

実をいえば王力が自説の誤りを認めて、〝三品〟説を取り消し、その著書の印行を停止したのには、スターリンの言語学説[註1]以後の語文界の状勢が大きに作用していることは想像に難くない。王力の自己批判[註2]の要点を跡ってその本質的な問題を考えてみると、王力にとって、その最大の意味をもつ批評は、その学説を批判するに、唯心的、反マルクス・レーニン主義的、反スターリン的、等々の攻撃をもってするものであったようだ。

王力によればその最初の批判は口頭で胡喬木 Hu Ch'iao-mu によって与えられている。それはこの学説が心理より出発して問題の研究に入っていることを指摘し、かつそれ故に誤りを犯しているというものであった。ついで一九五二年に Известия Академии наук CCCP に載ったムドロフの論文がある。[註3] 王力はそれを全く甘受して自説をつぎのように批判する。[註4] すなわちこの学説の長所は概念範疇と機能の種類を区別するところにあった。換言すれば、中国語においては〝詞〟は全く〝詞類標記〟をもたない故に、純粋に概念の範疇より分類を行い、形式上の拘束を受けないという点が王力の学説の長所であった。しかし、これはそのままその大きな欠点であり、逆に非言語的領域を語法研究の対象とすることは、metaphysics であるという非難を受けなければならない。しかもこの概念の範疇と〝詞〟の関係に対する思想はたまたまメシャニノフ И. И. Мешаниновが示しているところと一致する。[註5] スターリンは先の論文でマール И. Я. Марр を批判したが、その学説の後継者であるメシャニノフも、また、当時批判の渦中にあったことを考えれば、王力が如何

なる論理を用いようとしているのかは、すでに容易に推測できるところである。ともあれ、それは、概念範疇と〃詞〃の関係に対する批評に関する限り少なくとも妥当なものである。

すなわち王力は、メシャニノフに対する批判をもって自己への批判とするために、ここでポスペロフ H. C. Поспелов の意見を引用しなければならない。ポスペロフは、メシャニノフが文法範疇の本質とその形成方式を理解しないために概念範疇の唯心的な学説に走り、ために文の要素と〃詞類〃の関係に関する問題を正確に解決することができないといって、メシャニノフが「文の要素と詞類は如何なる言語においても共通一致する性格のものである」[註7]というアプリオリな原則より出発していることを批判する。ポスペロフによれば、実際は、事物の性質は正に或る名詞の語義と文法的意味より決定されるものであり、もし言語によらないで形象しうる概念範疇なるものがありとするならば、それは形而上学的な虚構であり、文の要素及び〃詞類〃はともにすべての言語に共通する「概念」の本質によっては表示されないという。[註6]

王力は基本的には自説に全くこれと同様の錯誤があることを認めているのだが、その時、実は〃詞類〃区分の標準を概念の範疇に拠ったのは、中国語の特性に応じた観点からであったことを少くとも紙面の上では再検討していない。しかしこれが〃三品〃説の批判として、主に論ぜられるのはいささか合点のいかぬところでもある。本来王力の〃詞類〃研究の立場は、形態論より放逐される中国語の〃詞〃を一応概念によって分類しておいて、それらと〃詞品〃との関係現象を調べること、すなわち論理上の範疇が語句の組織においていかなる関係を発見するかを問題とするにあった筈である。とすれば、中国語研究においては、〃詞類〃の区分はいずれ便宜的なものでよい。〃詞〃の研究の重要性はすでに〃詞品〃に負わされたと見るべきであるからである。無論、王力が〃詞類〃区分を語法研究上の最も重要な基本問題とし、かつ王力の考えた分類標準を絶対唯一のものとするならば、〃詞類〃を独立の事項として、その誤りを認めるに吝ではない。従って〃詞類〃のみを切り離して論ずるならば、すでに漢語品詞論争で得られた結果と同様の結論に、王力が到達するのは当然である。すなわち王力は反省の赴くところ必然的に〃詞〃相互の結合または〃詞〃と〃付加成分〃の結合、及び〃詞義〃を〃詞類〃区分の標記とする地点に到達する。しかし、そのような品詞が体系的文法論に入ってきた時、果して〃詞品〃論で扱われた領域については、いかなる考察がとってかわりうるのか。実はそこに問題があると見たい。それを示すことなしに、〃三品〃説を取消すことは

事実不可能な筈である。

だが王力は、〃句子〃において〃詞〃を〃三品〃に分類すること自体が、すでに唯心論的観点に立っているという。すなわち、王力によれば、〃詞〃を品級にわかつことは、たとえ可能であるにしても、時代、地域、条件を問わず、あらゆる言語に適用されうるという点でそれは形而上学的である。ここに再び王力の批判に対して疑義を提出することができる。この反省は公式主義よりの飛躍であることをそれ自身充分に示唆している。私見によれば〃三品〃説がこのような批判を受けることは、はなはだ理解できないところである。すでにイエスペルセンの分析と王力の体系は同一ではないのである。共通の方法論が、異なる現象を整理して異なる体系をうることに異論はない筈である。

さらに王力は、〃三品〃説自体に欠点ありとし、中国語において〃謂語〃がその最も重要な位置をもつべき筈であり、目的語がそれ程重要性を表象しないのに、一方が〃次品〃で他が〃首品〃であることを指摘している。これはこれより先、楊聯陞 Yang Lien-shêng, によってすでに言及されたところであるが、ここでは、これはもはや枝葉末節の問題であろう。[註8]

かくて王力は概念範疇によって〃詞類〃を区分することを排して、前述の二項目をその標記とする論証を行うが（それがその限りにおいては是とされるべきことはすでにいった）、結局、ロモノーソフ M. B. Ломоносов の古典的理論[註9]が唯物論的根拠をもつという理由で、〃詞類〃の論拠をそこに求めようとするもののようである。我々はここに王力の後退を認めることができる。我々は殊に中国語研究においては、伝統的体系からの離脱を、望みこそすれ、たとえ唯物論的論証のなされるものでも、そこに帰投する願望も理由も失っている。この十八世紀のロシヤ文法の創始者の古典的な体系は少くとも中国語研究には決して救いとはならないであろう。

そもそも〃三品〃説の特質は、〃詞類範疇〃と別個に〃詞品〃系列を考究する可能性を発見したことであろう。したがってその〃詞類範疇〃の分類基準は、本来〃詞品〃に関係なく論ぜられるべき性質のものである。すでに見た通り王力の自己批判において妥当とされる部分は、それが概念範疇と平行するという思考を排斥するという点にあった。しかしながらそれは〃三品〃説の本質に触れる問題とは独立に論議の対象とならなければならない。しかも〃三品〃説批判の場において王力が専らこのことを論議の対象としているのは何故であろうか。これははなはだ納得のいかないところである。

さらに〝三品〟説そのものに対する王力の批判は多く我々を納得させない。それに唯心的という罪名を冠する根拠を、はたして王力は示された理由以上にもっているのであろうか。たとえ唯心的であるという断案を我々が甘受するにしても、それが語法研究の分野から全く閉め出されるべきであるという結論を縦にするのを黙認することはできない。——誤解のないためにいっておくが、王力の〝三品〟説について改めるべきところなしとするのではない。我々は〝三品〟説的な考え方を、そのような単一の理由のもとに悉く排斥する議論に対して反駁するのである。

はなはだ冒険的ないい方をするならば、王力の自己批判には、王力の真意が、悉く表現されていないと考える。同様にもし乱暴な予想が許されるならば、そこに述べられた意味においては、恐らく〝三品〟説は取消されないであろう。〝三品〟説取消後の、本来その学説によって考究された領域に対する処理もまた、王力の示すところによれば、前述の二個の標準によって選ばれた〝詞類〟の範疇が、また同時にこの責任を負うに過ぎない。はじめにいったように、王力の予告について裏切られる可能性すらあるというのは、この二重の意味を内包しているのである。

註1 И. В. Сталин; Марксизм и вопросы языкознания. (Правда, 20-го июня. стр 3~4, 4-го июля стр. 3, 2-го августа стр. 2.)

註2 王力：中国語法理論（一九五四）新版自序

註3 Б. Г. Мудров; Китайское языкознание после выхода в свет трудов И. В. Сталина по языкознанию., Известия Академии наук СССР: Отделение литературы и языка, 1952, III. стр. 228~237.

註4 王力：同前、自序 p 7 ff

註5 И. И. Мещанинов; Члены предложения и части речи. (1945) стр. 190~191.

註6 Н. С. Поспелов; Категория времени в грамматическом строе русского глагола.. Вопросы теории и истории языка в свете трудов И. В. Сталина по языкознанию. стр. 286 и сл.

註7 О. Мещанинов. там же стр. 190.

註8　王力；同前p3

註9　M. B. Ломоносов; Российская грамматика.

（六）

考えるに、この学説が言語研究において、よくその任務を遂行するに適するか否かについての最も根柢的な問題は、むしろまず〝三品〟分類の根拠にある。フンケが〝三品〟説を批評して、それが純粋に機能による語の分類ではなく、従来の文法範疇を多く出るものではないという意見を提出したこと、及びその時はその「機能」という術語の解釈に、より多くの問題が残されていることはすでに述べたが、中国語においてこの伝統的な文法範疇の区分を行う時、王力がたとえ前述の二個の標準を選んだとしても、その各々の結果が必らずしも一致するという保証はない。そこで我々は、中国語の研究に資するための〝三品〟説を新たに認めて、それをつぎのように規定する。

すなわち我々は、やはり、名詞、形容詞、副詞、動詞などに分類されて、一般に品詞、または〝詞類〟と呼ばれている文法的諸範疇は、本質的には、王力が分類基準の一と考えている形式上の標準[註1]にあると考える。要するにそれらの範疇はたとえ辞書的に捕捉しうるものではなく、いくつかの〝詞〟の統合、連接した発話の中において発見されるにしても、純粋に文法的なものである。そして〝詞品〟については、やはり統語群といったような語の連関した発話の構造を、機能（〝詞義〟がどのように働いているかを機能的に見るという意味――従って意味といってよい）の側から観察して得られる〝詞〟の結合に関する理論とみるべきである。これは王力の第二の基準に相当するであろうが、それはやはり辞書的領域からは引きだされているのである。そしてこの場合の語の品級の名称は、第一の場合に一致しても、しなくても自由である。ただし形式上の問題と機能上の問題は、厳密に区別されておかなければならない。品詞論争で得られた広義の形態論の扱うものの一部は、第一の場合に含まれ、第二の場合は〝詞〟が発話に該当した時に、表象しうる詞義の修飾、および限定の作用を専ら問題にする。このような考え方は、〝詞品〟は〝詞類〟（必らずしも形態範疇ではない）と往々一致はするが、原理上一致する必要はないというイエスペルセンの根本的な考えに悖らないであろうし、またたまたまメシャニノフと同様に非科

学的な考察であった王力の概念範疇が、〝詞類〟を弁別するという意見をも放逐することができるであろうと考えられる。

だが、第一の基準による〝詞〟の分類が我々を完全に満足させるような、完全な体系に落ちつかないであろうことは当然予想される。それは何といっても中国語の宿命のようなものである。そこで我々は第二の基準による分類には、これを補足する任務を負わすことを最初から目的としなければならない。

すなわち、呂叔湘 Lü Shu-hsiang は、基準のAではaに、そしてBではbに分類される場合を考慮すれば、この二個の範疇が重復する領域をどのように解決するかを考えなければ、語法成分の付加、または語の連接関係などによって〝詞〟を分類する試みが、〝一詞多類説〟、〝詞類通仮説〟、〝無定類説〟に流れるだけの結果しか齎さないことを警告している。しかるに、[註2] 文練 Wên Lien 胡附 Hu Fu のいうところによれば、[註3] 〝一個、両塊、三支、四本、五杯〟や〝這個、那塊、那支、那杯、那種、一次〟等に続く語は同一の文法範疇に入れて名詞と名づけられ、つぎに〝不、会、能、敢、該〟等に先行され〝了、著、起来、下去、過去、過来〟に続かれるものは動詞とされる。この時、我々は呂叔湘のいったように、たとえば〝思想〟が〝思想起来〟といわれる一方、また〝一個思想〟、あるいは〝那種思想〟ともなる事実を前にして困惑せねばならない。〝詞品〟論はかかる現象を何等かの解決に導くために考究されると同時に、語類相当語句（一応 equivalent のごときもの）には、そのような標準は適用されえない非常に多くの場合が考えられる以上、またそれらに対する分析の理論とすべきであると考えなければならない。

よって我々は文法理論上、二つの領域のみを区分することになる。すなわち(1)形式、および(2)機能である。そのそれぞれが、イエスペルセンの三つの領域のうちの、概念の領域以外の二つのものと意義を異にすることは、いま述べた通りである。なおまた我々は文法理論上という条件の下においては、extra-lingnal な概念の領域を全く顧みないことにすべきである。これらのことは、我々の機能に対する考えが、フンケによって批判されたイエスペルセンの機能よりも、さらに多く非難されるべきところまで押しやっていることを意味する。例の概念特殊化の理論を顧慮しない以上、そしてまた王力の自己批判の概念範疇の取消に関する部分を認め、かつ王力の〝造句法〟の有効性を認める時それは致し方のないことなのだ。

ただこの意味での〝詞品〟論は、必らずしも〝三品〟に止まる必要もないように考えられるであろう。イエスペルセンは subjunct

以下の rank をさらに分類することは、第四の rank をさらに分類すべき形態上その他の特徴が示されないから無意味であるということをいっている（本稿第三節参看）。このことについて、我々はフンケの行っているのとは全然別の意味で異を唱える可能性があるものと思う。tertiary に〝末品〟なる術語を与えた王力は、それが〝三品〟より、〝首品〟、〝次品〟に配してより適当である理由を掲げはするが、実のところ、イェスペルセンにいわゆる〝四品〟、〝五品〟（quaternary, quinary）のない以上〝三品〟は当然〝末品〟であるというように考えている。しかし、考えるにこれは、〝実詞〟のみが〝分品〟されるとした思想に由来するものである。いま我々は、王力の〝造句法〟から完全に取り消されるのは、その〝詞類〟に関する条項であって、他は、王力の自己批判を採らないで、改めてその有効性を認めようという提唱をおこなった。この理由によれば、〝三品〟は必らずしも〝末品〟たる必要もないし、我々はさらに多くの〝分品〟をおこなうことの妥当性すら発見することになるであろう。

（一九六〇年十月）

註1　王力・中国語法理論上冊　新版自序p12。

註2　品叔湘；关干汉語詞類的一些原則性問題（〈中国語文〉一九五四年九、十月）

註3　文練・胡附；談詞的分類（〈中国語文〉一九五四年二、三月）